試験得点の標準化はなぜ必要なのか
ー前川らの論文に対するコメントー

名古屋大学　村上　隆

1.　試験得点の標準化の意味

これは，いかにもさりげない調子で書かれた論文であるが，少なくとも2つの，相互に関連した重要なインプリケーションをもっている。

まず第1に，この研究が大学入試センター試験の得点の等化（equating）に道を開くものであることが強調される必要がある。大学入試センター試験の各教科・科目の平均点（と標準偏差）は，毎年変動しているが，著者らも指摘するように，その原因は一義的には定められない。得点分布の変動は，試験問題の難易度だけでなく，受験者の能力分布の違いにも依存するからである。このような変動は，実際に受験者に公平をもたらすから，大学入試センターでは，これに対処するために得点調整の方法を用意している（真弓・村上・白旗・吉村・前川，1999）。このやり方は，現在のところ，社会的に受容されているように見えるものの，問題の根本的解決にはなっていない。少なくとも，現在の方法は，同一教科内の科目間の調整だけを行うものであるから，従来からたびたび話題にのぼっている，大学入試センター試験の年間複数回実施や，得点の複数年有効化に対応できるようなものではない。

第2に，大学入試センター試験の得点の経年的変化にもとづいて，近年しきりに話題になる，大学入学者の学力低下（たとえば，岡部・戸瀬・西村，1999）の証拠を見出せないかということである。このことは，大学入試センター試験の本来の目的ではないが，毎年，これだけの規模のデータが得られる以上，この要求を全く無視し去ることはできないであろう。

こうした要請に応じるためには，「過去の試験の難易度の推定」と「各年度の受験者層の学力の推移」を同時に可能にするような，得点の標準化を行う必要がある。

2.　方法についてのコメント

各年度の得点を相互に比較可能なように変換することは，心理・教育測定学の分野では，得点等化として知られている。得点等化の方法にはさまざまなものが知られている（例えば，前川，1999）が，煎じ詰めればそれらの方法は，事前に困難度の判明している項目を用いてテストを作成するか，能力分布が同一であると見なせるような集団に関してテスト得点の分布を求めるか，どちらかしかないことがわかる。言い換えれば，第1の方法は，得点等化を目指す2つのテストに共通の問題を含めることによって，第2の方法は，2つのテストを同じ（と見なせる）受験者集団に受けさせることによって，それぞれ実現される。第1の方法は，一方のテストに実施時に，その問題を不特定多数者の目に触れさせなければならないから，異なる時期に実施されるテストの得点を等化する方法としては，（現在のわが国における入試の実状を考えると）ちょっと使いにくい。後者に関しては，どのようにして，能力の等質な集団を認定するか，という点でやはり困難がある。

本号掲載の論文で，前川らは共通一次試験と大学入試センター試験の過去の問題を，大問を単位として取り出し，それらを部分的に重複させた複数の版のテストを作成，それらを，等質と想定される大学生の集団に受験させるという方法で，過去に大学入試センター

によって実施されたテストの困難度を比較でき，かつ，それらの問題を含む試験が実施された時点における受験者集団の学力水準を推定できるように，同族モデルを用いて共通尺度を構成するという方法をとっている。ここで用いられたデータの収集法と分析モデルは，こうした研究の出発点として手堅いものと言えるであろう。また，検討の対象とされたのは，英語と数学の 2 教科であるが，これも最初の試みとしては，賢明な選択であろう。

3. 結果についてのコメント

さて，その結果はどのようなものであったであろうか。試験問題の困難度は，おおむね，それが実施された時点における平均点と一致した方向で変動しており，受験者の学力には，一貫した方向での変化は見られないというものであった。この結果を額面通りに受け取るとすれば，少なくとも，英語と数学に関する限り，従来生起していた平均点の年度間の較差は，得点の偏差値化によって解消できたことになる（この点については，真弓他，1999 の議論を参照のこと）。

実際には，前川らが分析の対象としていた期間において，大学入試センターが実施する試験の受験者層は大幅に拡大しており，そのことだけをとっても受験者集団の平均的学力は低下していたことが予想される。にもかかわらず，そのことが前川らの結果に明確に現れていないと言う事実は，学力低下の事実を否定するものというよりは，この研究の妥当性に疑問を投げかけるという印象は否めない。

こうした疑念に答えるためには，前川らも述べるように，実験に用いられる被験者数の増加や項目レベルでの分析に加えて，当該期間における教育課程の変化を考慮にいれることも必要であろう。

文　献

前川 眞一 1999 得点調整の方法について 柳井晴夫・前川眞一（編著）大学入試データの解析　現代数学社　88-109.

真弓忠範・村上隆・白旗慎吾・吉村功・前川眞一 1999 大学入試センター試験の得点調整　大学入試フォーラム，No. 21，4-18.

岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄 1999 分数できない大学生 東洋経済新報社